

令和元年度

【優秀作品集】

「大切な命を守る」
全国中学・高校生作文コンクール

警察庁 犯罪被害者支援室

発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）が、再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等を直接対象とした支援のみならず、地域社会や学校・職場、さらには将来の社会を支える子どもたちに、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深めていただき、社会全体に犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から、全国警察では教育委員会や民間被害者支援団体等と連携して、これからの社会を担う中学生・高校生を対象に、犯罪被害者等による講演や犯罪被害者等の手記の朗読等により、犯罪被害者等が受けた様々な痛み、子どもを亡くした親の思い、命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を望む犯罪被害者等の思いを伝える「命の大切さを学ぶ教室」の開催に積極的に取り組み、警察庁では、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させる施策として「命の大切さを学ぶ教室全国作文コンクール」を開催してきました。

この作文コンクールにつきましては、今年度からは「命の大切さを学ぶ教室」受講者に限らず、中学・高校生が命の大切さに関する多様な機会に感じた考えや意見等についても作文にすることにより、犯罪被害者等への理解を更に深め共感を生む効果を期待し、コンクルールの名称を「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールに改めるとともに、応募資格を命の大切さを学ぶ教室受講者以外にも拡大するなどの見直しを行いました。

これにより、「令和元年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクール」では、犯罪被害者等への支援や命の大切さについて考えた全国の中学・高校生から、これまで以上に多様な意見が述べられた作品が集まり、その中から優秀作品を選考しました。

本冊子は、全国から応募された作品の中から選考された、

- ・ 国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点
- ・ 文部科学大臣賞……………二点
- ・ 警察庁長官賞……………六點

を取りまとめたものです。

警察としては、被害者支援に携わる方々との緊密な連携の下、犯罪被害者等支援に関する施策に取り組んで参りますが、本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等はもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

令和二年三月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 山田 知裕

目次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・「生きる」ということ

熊本市立力合中学校

三年 上 蘭 祐己

……

2

【文部科学大臣賞】

- ・たった一つの命だから

川崎町立富岡中学校

二年 佐々木 梨那

……

4

【警察庁長官賞】

- ・「命の大切さを学ぶ教室」の授業を受けて

豊島区立池袋中学校

二年 星野 日向

……

6

- ・教えてもらった二つの大切なこと

横浜市立岡野中学校

三年 武田 遥香

……

8

- ・希望をつかむ手

名古屋市立萩山中学校

二年 中西 大地

……

10

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・目に見えない命

千葉県立千葉女子高等学校

一年 宮澤 結友

……

14

【文部科学大臣賞】

・尊き命のために

学校法人滝学園滝高等学校

三年 坂田 侑美奈

……

16

【警察庁長官賞】

・死にたかった私 これからの私

富山県立高岡工芸高等学校

三年 澤田 彩夏

……

18

・流れていく時の中で

大分県立中津東高等学校

三年 城 侑市

……

20

・若い命の尊さ

茨城県立大洗高等学校

三年 谷脇 恭平

……

22

【中学生の部】

「生きる」ということ

(熊本県)

熊本市立方合中学校 三年 上うえぞの 菌 祐ゆう己き

「あなたたちは、ここにいてるだけで価値がある。生きることをあきらめないで」

この言葉は、先日学校で行われた「命の大切さを学ぶ教室」で、講師の中谷さんが言われた言葉です。中谷さんは、十三年前、高専に通っていた娘の歩さんを、同級生に殺害された犯罪被害者の家族の方です。警察署で亡くなった事実を聞かされた帰り道、あまりの絶望感で何をどうしてよいのか分からなかったそうです。そんな辛い思いをされているにも関わらず、その経験を全国で伝え続けられている中谷さんはとても心が強い方だと思います。これまで

周りのたくさんの人に支えられ、悩みながらもこの活動をされていると考えると本当に胸が痛くなりました。

僕は、いじめに遭って死を考えた経験がありません。小学校三年生のとき、毎日が憂鬱で、学校に行くのがとても辛かったです。家でも弟とうまくいかずに、毎日を生きるのが大変で、本当にきつく、つらく、何をすればいいのかすら何も分からなくなっていました。母にそんな思いを打ち明けたのは、お風呂の中でした。母はシャワーを止め、湯船につかっていた僕の肩をつかみ、泣きながら話をしてくれました。

「生きててくれてありがとう。生まれてきてくれてありがとう」

母が言ってくれた言葉です。僕はこの言葉に泣いてしまったことを覚えています。胸の痛みが消え、救われたような思いがしたからです。中谷さんの言葉は六年前の母の言葉を思い出させ、胸に突き刺さり、気がついたら涙が出ていました。なぜかは僕に

も分かりません。中谷さんの思い、母の思いを考えると言葉にできないほどの感情が僕の胸に押し寄せてきました。

母に打ち明けた後、担任の先生、いじめの相手と何度も話し合い、仲直りをし、友達となつて初めて家に遊びに行った日の思いは今でも忘れません。生きていてよかつたと心から思いました。

今、僕は「生きる」ということは、未来を信じ続けることだと考えています。誰でも一度や二度は「自分なんて存在していて何になるんだ。自分が生きていく意味なんてあるのだろうか」そんなことを考えたことがあると思います。それでも、自分を信じて奮い立たせ、何より生きることを諦めないことが大切だと思います。中谷さんの講話を聞いて母の言葉を思い出し、改めてそう考えました。これからも、何があつてもくじけずに、自分を信じて頑張つていきたいと思えます。

たった一つの命だから

(宮城県)

川崎町立富岡中学校 二年 佐々木 梨那

小学校六年生の時、私は友達に命を助けてもらいました。やんちゃな私は、登下校中も落ち着きがなく早く家に帰りたい一心で走り出すことも多かった

のです。その日も信号待ちで、ようやく青になった時、左右も見ずにスタートダッシュ。その瞬間「危ない！」と隣にいた友達が私を引き止めました。信号無視で走っていたトラックに私はぶつかる寸前だったのです。あの時、友達が声を掛けてくれたかったら私はこの世に存在していません。

もし、そうなっていたら…。そう改めて考えることができたのは、学校で「命の大切さを学ぶ授業」

を受けたからです。内容は、最愛の息子を失ったお母さんの手記でした。「いつてきます」と元気に家を出た息子が信号無視の大型クレーン車にひかれポロポロに。「なぜ我が子がいなくなってしまったの？」という深い悲しみと加害者に対する怒りで気持ちが壊れてしまいそうになったそうです。

この話を聞いて私はふるえが止まりませんでした。もし、あの時、私がお母さんの子どものように死んでいたら、どれだけ母や家族が悲しむでしょう。その痛みを想像することができたからです。

私はこの授業を受ける前は、あの時死んでいたら今のような苦しみや辛さを味わうことはなかったのに。別に私が死んでも誰も悲しまないと思っていました。

しかし、そんなことを少しでも思った自分は命について真剣に考えていなかっただけです。きっと母も家族も私を亡くしたことで自分らを責め、苦しんでいたかもしれない。目の前で私が命を亡くしてしまっていたら友達にも一生の後悔を植え付けていたかもしれない。

「ああ、あの時、助かってよかった。生きていて良かった。」そう心から思えるのです。

今、社会問題になっている自殺。生きるのが辛くなったから、自分なんてどうでもいいという理由で簡単に自分の命をあきらめてしまう人が多くいます。未成年の自殺は過去最高との新聞記事も読みました。

どんな理由があろうと、簡単に命を捨てることは絶対にしてはいけません。生きたくても生きることができなかつた命があることを忘れてはいけません。亡くなってしまうたら悲しむ家族がいることを忘れてはいけません。苦しいことも、嫌だということも、失敗して落ち込むこともあるでしょう。でも、友達とのおしゃべりや勉強や部活動の達成感や毎日のご飯がおいしいこと。何気ない日々がとても幸せなのだとは私はずきましました。そして生きていくだけで誰かを幸せにしていることも分かりました。

友達に助けてもらったこのたった一つの命。私を愛してくれる家族のために大切に、一度きりの人生を輝きながら生きていきます。

「命の大切さを学ぶ教室」の 授業を受けて

(東京都)

豊島区立池袋中学校 二年 星野 日向

私は今日も生きています。けれど、私にまた明日がやってくることは決して当たり前ではないということ私には知っています。

私たちの学校に命の授業の講師としていらしてくれた高田香さん。三年前高田さんは交通事故で小学一年生のけんちゃんを失いました。学校からの帰り道、青信号の横断歩道をほんの少し進んだ所で右折してきたトラックに命を奪われました。

裁判で判決が出て、その刑の重さに関わらずけんちゃんは帰ってこないという言葉が印象的で

た。また会いたいののに。帰ってきて欲しいのになぜ大切な人が亡くならなければならなかったのか。その答えが見つかる日は来るのでしょうか。あの日一分前まで大人がそばにいたこと。家まであと少しだったこと。何かが少しでも違ったら。でも時間は戻すことができないことが本当に辛いです。

けんちゃんが亡くなった時、こんな悲しいことがあるんだね、と言ったけんちゃんのお姉さん。お姉さんは当時私と同じ中学二年生でした。この言葉は私の心の中で何度もくり返されました。こんな言葉を中学二年生で言わなくてはならなかったお姉さんがとてもかわいそうだと思います。

高田さんのお話は、突然大切な人を失う悲しみ、そして理由もなく今まで通りの明日がやって来ない恐さを私たちに教えてくれました。私は命の授業を受けてもまだ命ということについて具体的にまとめることができません。けれどいつも出かける前に何度言えば気が済むんだろうと思っっている母の「気をつけてね」の言葉の意味がわかったような気がしま

した。そして私がいなくなった後の母の姿を想像して絶対に母を悲しませたくないと思いました。

事故の状況の説明、法廷で読んだ陳述書の朗読、その後の高田さんの日々、私たちに語りかける高田さんは静かに落ち着いていました。けれど私には高田さんが傷だらけになりながら必死に立ち上がろうとしてる姿に見えました。

高田さんが傷だらけの心で若い私たちに命の大切さを教えてくれることにただ甘えているだけでいいのでしょうか。中学生の私にもきつとできることがあるはずです。高田さんは友人に話を聞いてもらったことが困難に立ち向かう勇気になったと言っていました。私もそれを聞いて誰かの苦しみや悲しみに気づいて声をかけられる人間になりたいと思いました。前を向こうとしている人の背中を押せるように、困難に立ち向かおうとしている人に手を差し伸べれるようになりたいです。

当たり前前にも明日がやってくることはとても幸せなことです。今回の命の授業をきっかけにその当たり前

前の明日をただ待つのではなく、自分で迎えに行けるように自分自身、そして大切な人としっかり今日を過ごしたいと思います。

教えてもらった二つの大切なこと

(神奈川県)

横浜市立岡野中学校 三年 武田 遥香

私には十一歳年が離れた弟がいる。弟が生まれた時、こんな小さな体で本当に大きくなれるのだろうかと思議で不安な気持ちでした。日々大きくなる姿に感動すると同時に、人を育てるにはこんなに沢山の手が必要で、周りの人に支えられて初めて健康で大きくなれるということを知った。

先日、学校で受けた「命の大切さを学ぶ教室」という授業の中で一本のビデオを観た。それは、交通事故という辛い経験を乗り越え、四月からの高校生活を心待ちにしていた主人公が、ある少年から暴力を受け、命を落としてしまうという悲惨な内容だっ

た。何の罪もない私と同じ中学生が亡くなるという現実にとても心が痛んだ。特に、母親が深い悲しみに襲われ、涙を流すところに命の重みを感じた。同時に、弟が大きくなる姿から感じた周りの人の思いや支える人の力の尊さを改めて思い出すこととなった。

私は、今まで身近な人を事件や事故で失い、悲しい思いをした経験はない。しかし、弟の生を感じ、人の死を考えた時、人の命には様々な人の思いがまつまっているものであり、周りの人に支えられているからこそ存在するものなのだと思った。私は毎日支えてもらっている両親や周囲の人に反抗的な態度をとってしまったりすることがあったが、もっと感謝の気持ちを忘れず、日々大切に過ごしていかなければならないと反省した。

授業で講義してくださった人が言った「紙をぐしゃぐしゃに丸めてしまったらそれを広げても、きれいに元通りにすることができないのと同じように、突然大切な人の命を失った人の心の傷も、元に

は戻らない」という言葉が胸にぐっとつきささった。なぜなら自分にも同じような経験があるからだ。

ずっと前に言われた嫌な言葉をふとした時に思い出すことがある。辛いことがあったら、たとえ忘れようとしても頭の中から離れないのだ。自分も知らず知らずのうちに入を傷つけていないかと心配になる。身の回りのささいなことからでも、相手の立場になって想像することが大切なのだと思わされた。

今の世の中、自殺や虐待、暴行などの事件が度々続き、連日のようにニュースになっている。自分が事件の被害者の立場になることを想像してみれば、ニュースのとらえ方は大きく変わってくる。世界で起きていることを他人事とせず、人の気持ちを想像し、理解していくことができれば、決して他の人を傷つけたり、命を粗末に扱ったりすることはなくなると思う。この世界の全ての人の一つの命はかけがえのないものなのだ。

希望をつかむ手

(愛知県)

名古屋市立萩山中学校 二年 中西^{なかにし}大地^{だいち}

「夢や希望をつかむためにこの手はしっかり使って欲しい。」

僕はこの言葉が深く心に刺さった。

命の大切さを学ぶ教室で則竹崇智さんが言っていた言葉だ。則竹さんは次男を交通事故で失っていた。事故の原因は運転手がスマートフォンを見ながら運転するいわゆるながらスマホだったからだ。苦しくつらい経験をされた方の言葉だったからこそより自分の心に響いた。

平成三十年にながらスマホによって起こった事故は二七九〇件というとても多いものだった。更に事

故の数は年々増えてきているという。僕はこのデータを見て悲しくなった。

なぜそんな軽率なことで怪我をしたり命を失う人が出てきてしまうのだろう。僕はそう思った。一人の軽い気持ちが重大な事故をひき起こす。そんなことがあつていいのだろうか。責任感を持っていない人が運転することはよくないと思う。自己中心的で周りが見えない人が運転してはいけないと思う。自転車も同じだ。最近、自転車を運転しながらスマホをいじったりイヤホンをしている人をよく見るがそれも責任感が無いと思う。事故を少なくしていくためにはこのような人たちが自分の運転を見直し、もう一度安全運転に心がけてくれればいいと思う。

他にも自分の手で人を傷つけることはある。人に暴力を振るったり、SNSによるいじめをしたりとたくさんの方が多くの人を苦しめていると思う。それも全て自分が意識してその手で人を傷つけていることになる。このようなことをやっている人たちにも則竹さんの言葉のように人を傷つけるために手

を使うのではなく夢や希望をつかむために使ってほしいと思った。

誰も傷つかないそんな世界を実現するのは無理だと思う。誰だって悩みを抱えるときはあるし、苦しい時だってある。しかし人が軽率な考えで起こしたことよって人を傷つける。そんなことは減らせると思う。自分の軽率な行動が誰かを苦しめ、傷つけてしまうかもしれないということを誰もが理解することを僕は強く願っている。そして自分の手で夢や希望をつかみ、笑顔があふれる世の中になっていけばいいと思った。

【高校生の部】

目に見えない命

(千葉県)

千葉県立千葉女子高等学校 一年

宮澤 みやざわ 結友 ゆづ

「できることなら、妻を殺した犯人を自分の手で殺したいと思いました。」涙を流しながら苦しそうに発した男性の言葉に私はこらえていた涙をこぼしてしまいそうになりました。

私は、夏休み前の総合学習で、「命について考える授業」を受けました。その授業ではひたたくりによって最愛の奥様を亡くされた男性が事件当日のことや、裁判の様子を細かく私たち生徒に教えてくださいました。男性は本当に奥様を愛していて、失った悲しみ、辛さ、犯人を憎む気持ちは、何年経っても消えず、被害者遺族が負った心の傷は一生癒える

ことはないのだと男性の話を聞いて実感しました。

私は、男性の話を聞いていて、「命とはなんだろう？」と思い始めました。命は目に見えません。しかし、私たちが今生きていて、いつかわからないけれど死ぬ、という決まりが命は存在するものだと教えてくれます。しかし、私たちは、命があり、生きていることが当たり前だと、過剰に信じ過ぎていてではないかと思いました。人は必ず死にます。だけれどいつ死ぬのか、どうやって死ぬのかは誰にも分かりません。しかし命は突然、一瞬で無くなってしまふことがあります。残るのは死体だけで、命は見えません。もしそんなことが自分の身の回りに起きたら、残された人間はどうなるのでしょうか。大切な人との思い出だけが頭を巡り、これから作るはずだった未来の思い出は無くなってしまふ。辛い日々を憎む毎日はとても悲しいです。自分も大切な家族も友達も生きているのは、当たり前ではないのだと私はこの授業を通じて学ぶことができました。

私はそれから、命を大切にして生きる努力をしよ

うと思いました。一日、一日を大切にし、その日にしかできないことを一生懸命行うことを心がけました。そして、相手を大切にしようという気持ちが強くなりました。男性の話で、ひったくりをした犯人は、「パチンコをする金が欲しかったから犯罪をした。」と言っていたそうです。自分の欲求を満たしたいがために、見ず知らずの他人を傷つけ、命までも奪う行為は許せないと思います。しかし、命は奪わなくとも、人の心や体を傷つけてしまうことは、私たちも行ってしまうことがあります。その行為は命を削っていると考え、言動に気を使おうと思いましたが。相手の気持ちを少しでもいいから考える心の余裕を持つことが大切だと感じました。

私の大好きな本の一つである「星の王子さま」には、こんな言葉があります。「とても簡単なことだ。ものごととはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは目に見えない。」命の大切さについて考えているとき、私はこの言葉が思い浮かびました。目には見えないけれど絆や愛や時間が命

そのものを表しているのだと思います。それらがあ
ることを確かめることはできませんが、私たちがそ
れらによって生きていることは確かです。

今を生きられることに感謝し、見えないものと向
き合うことで、自分も相手も好きになり、大切にし
ようと思う心が増えれば、犯罪は減ると思います。
命の大切さは表せるものではありません。しかし、
少し意識するだけで大切さに気づくことができま
す。生きていることは当たり前ではありません。そ
れなら私たちはどう生きていけばいいのか、考える
ことが大切だから。

尊き命のために

(愛知県)

学校法人滝学園滝高等学校 三年 坂田 侑美奈

「おばあちゃんどこ行くの？」

曾祖母の葬儀で弟はぼつりと呟いた。いのちの儂さを前にして何も答えることができなかった私。しかし、佐藤逸代さんの「命の大切さを学ぶ教室」は私に新たな道を提示した。

「有希は突然いなくなってしまうんです。」涙ながらに語る、佐藤さんの姿が目には浮かぶ。娘の有希さんは中学一年生の夏、交通事故で亡くなった。大切な人を一瞬のうちに奪われてしまった佐藤さんの悲痛な叫びは私の心に深く突き刺さった。その中でも、有希さんの妹が書いた「ありがとうの手紙」の

ことが忘れられない。

私は、誰よりも厳しく、そして誰よりも優しい曾祖母が大好きだった。曾祖母は私がいに行くときにも必ず、「またね」と言って手を振ってくれた。しかし、学校が忙しくなるにつれて会いに行く回数は減っていった。久しぶりに会った曾祖母は、喋ることも動くことも満足に出来なくなっていた。それでも、帰る時に「またね」の代わりに小さく手を振る姿を見た私は、いつもと同じように「またね」と言っただけ手を振り返した。その二日後、私は曾祖母の訃報を聞いた。いろんなことを教えてくれてありがとう。私を大切にしてくれてありがとう。たくさんの「ありがとうを言い残していたことに気づき、後悔の念に駆られた。」

曾祖母の死によって私はいのちの儂さを強く感じるようになった。今まで遠いものと思っていた死が突然近くに迫って来たのである。怖くなった私はなんとか曾祖母の死を自分から遠ざけようとした。そんな中間いた「ありがとうの手紙」。ひたすらに有

希さんへの感謝が綴られたこの手紙を聞くうちに、有希さんの妹と私が重なっていくように感じた。しかし、その手紙は謝罪のために書かれたものではなかった。有希さんは自分の心の中で生き続けていると考え、これからも支え合いながら生きていこうとする未来への希望を伝えるものだったのである。私のいのちは曾祖母と繋がっていると思うと、心がじんわりと温かくなった。そして私は今までの自分の考えが間違っていることに気づき、命の尊さを切に感じるようになったのだ。

また、有希さんのことを愛しく思う佐藤さんの家族を見て、私を支えてくれてるのは亡くなった曾祖母だけではないことを再認識した。家族、友達、先生方がいるからこそ今の私がある。私の中に感謝の気持ちが入り込んだ。そして、

「自分を愛し、そして他人を愛して欲しいのです。」という佐藤さんの言葉を思い出す。感謝の気持ちを伝えるため、思いやりの心を持って生きていく。私は曾祖母に伝えられなかった「ありがとう」を多く

の人に届けたいと思うようになった。

いじめによる自殺者、交通事故や犯罪に巻き込まれて亡くなる人が絶えない今、私達にできることはあるか。いのちとは唯一無二で取り替えのきかないものである。誰かの心無い行動で失われるべきものではない。だからこそ、私達は仲間との繋がりを意識し、思いやりの心を持って人と関わるべきである。すぐに成果が表れるものではないが、これは「予期せぬ死」を防ぐ大きな一歩になるのではないだろうか。

私の中で生き続ける曾祖母のいのち。多くの人に支えられている私のいのち。私は自分のいのちを尊び、今を精一杯生きていきたい。家族の団欒、友達との会話。佐藤さんの講演を通じて、私はあたりまえの日常を大切に愛おしいものと感じるようになった。「ありがとう。」そう伝える為に思いやりの心を持って生きていく。尊きいのちのために、新たな一歩を踏み出そう。

死にたかった私 これからの私

(富山県)

富山県立高岡工芸高等学校 三年

澤田^{さわだ}

彩夏^{あやか}

みなさんは、「死にたい」と思ったことはありませんか。

中学生の頃の私は、自分の性格や、外見のコンプレックスでたくさんの悩みを抱えていました。人との違いは、あって当然のことだということに気づかず、自分に自信がもてませんでした。家では泣いてばかりで、命を絶ちたいと思ったり、それを口に出したりしたこともありました。

時は流れ高校に入学すると、自分と周囲との違いを認め、理解して、自分自身を受け入れられるようになりました。自殺、殺人事件、交通事故等、毎日

のように報道しているテレビ番組を見て、憐れんだり、時には憤慨したりすることもあります。私なりに、命の大切さを理解しているつもりでした。しかし高校三年生の夏、実際に命の大切さを肌で感じる出来事がありました。

学校で、「命の大切さを学ぶ教室」という講演会がありました。それは、交通事故で愛する旦那さんを亡くされた女性が、その体験を通して命について語る、というものでした。女性は、涙ぐみながらものように旦那さんを亡くされ、どのような思いだったかを丁寧に話しておられました。ごく普通の、どこにでもある朝を迎え、会話を交わし、いつもと同じように「いつてきます」と言って家を出た旦那さんは、仕事に行く途中、交通事故に遭われました。もう二度と会えなくなってしまうのです。小説や映画等の創作物ではなく実際の話だと思つと鳥肌が立ちました。突然その姿を、笑顔を見ることができなくなってしまうた女性の気持ちは計り知れませんが、事故から何年も経過した今でも、語りながら涙

を流している女性を見て、「死にたい」と簡単に口に出したり、命を軽んじた発言をしたりしていた過去の自分が猛烈に恥ずかしく、本当に愚かだと思いました。かつての私は、自分には何も取り柄がない、自分は孤独だと感じていました。しかし、この女性の旦那さんのように、自分の命も誰かの人生に影響を与えているのではないか、と思いました。ふと、家族や友人の顔が浮かびました。私のことを産み、愛し育ててくれる両親、いつも私を見ると喜んでくれる祖父母、どんなことでも話せる弟、毎日の生活を楽しく、充実したものにしてくれる友人たち。その誰もお互いを必要とし合っているということに本当の意味で気づくことができたと思いました。生きて、笑ったり泣いたりできることが当たり前のようで実は当たり前ではなく、喜ばしく美しいものであるということ、私はこの講演会で学びました。テレビ越しに見る映像や、新聞やスマートフォンで読む記事に並べられた文字が嘘だとは言いません。しかし、それらでは感じることでできない、当事者

の悲痛な叫びと生きた言葉がそこにありました。

もしこの講演を中学生の私が聴いていたら、生きていることの素晴らしさや、「いつも通り」の幸せにもっと早く気づくことができたのでしょうか。過去に戻ってそれを確かめることはできませんが、これからの私は、それを心得て人生を歩んでいくことができます。いつか、私の「いつも通り」が終わってしまうその日まで、それがいつなのかは誰にも分らないけれど、中学生のときに感じられなかった命の大切さ、重みを噛み締め、精いっぱい生きたいと思えます。

流れていく時の中で

(大分県)

大分県立中津東高等学校 三年 城じょう 侑市ゆういち

大切な命とはなんだろうか。人それぞれではあるが私にとっての大切な命は、家族、友人、先生、少なからず私と関わった全ての人を私は大切な命だと思っている。

そんな大切な命を、私は過去になくした事がある。私が十一の頃、祖父が他界した。祖父は気難しく、両親には横暴に接していたが私には優しく、とてもかわいがってくれた。

祖父の命日は今でも覚えている。今後とも忘れることはないだろう。仲の悪かった母と祖母が病院のベッドで静かに眠る祖父を囲み、涙を流している。

当時の私には異様で衝撃的な光景であった。後に祖父の死について告げられ実感が湧かなかつたのだが、母と祖母の涙を見ると嫌でもそれが事実であると認めざるを得なかった。

大切なものがなくなるというのは、頭ではわかっていても時間を経なければ理解することはできないと思う。今振り返ってみると祖父が亡くなった瞬間はそれほど悲しい気持ちにはならなかった。それよりも母と祖母が祖父を囲い涙しているという事実がひたすらに衝撃で悲しい気持ちというのとはなかった。自分がまだ小学生だったということもあるが、本当に実感が無かった。その日から祖父のいない生活が始まった。何気ない日常。朝起きて、学校へ行き、帰って飯を食べ、就寝する。

何気ない日常なのだが、祖父がいない。最初の頃は母と祖母が涙を流していたという衝撃的な記憶が頭を埋めていたが、それも徐々に風化し、祖父がいないことへの寂しさ、悲しさが募っていった。今ではその悲しさも風化し、祖父がいないことが当たり

前となった何気ない日常を送っている。

私はこれまでに理不尽な交通事故で娘さんを無くされた方やいずれも被害者側としては納得のできない理由でご家族を亡くされた方の講演を拝聴してきいた。講師の方々は私たちに聞き取りやすいように話してくださるが、きつとその言葉、その文には悲しさ、寂しさ、怒りといった感情が含まれているだろう。講演を聴くたびに私は心が痛くなる。私が祖父を亡くしたという悲しみは時間とともに風化し、今では無くなってしまうが、講師の方は講演を行うたび、いやほば毎日大切な人のことを思い出し、様々な思いがこみ上げているだろう。私には到底できない。思い出ただけでも悲しみで心が一杯になる。講師の方の素晴らしいところは大切な人の死を決して無駄にせず、講演を介して多くの大切な命を守るように啓発しているところだ。

世の中には想像をはるかに超える数の理不尽な事故が起こっている。不安定な運転で多くの命を奪った昨今の高齢者ドライバーの交通事故も然り、それ

は今でも起こり続けている。そのほぼ全てが私たちに直接は関係せず時代の流れとともに忘れられ、大切な命を失った人の悲しみも忘れ去られる。しかし、私たちには交通講話を通じて理不尽な事故について、命について考える機会が与えられている。講師の方は命を無駄にせず、私たちに意思を繋ごうとしている。私たちはただ感想を述べるだけでなく、大切な命を守るための行動をしなければならぬ。

私はその行動として基本的なマナーを徹底している。自転車であれば脇見運転をしない、歩道を走行しない、並列走行をしないなどを徹底している。最もしてはいけないことは何もせず、講師の方々の意思を風化させてしまうことだ。命は人の数だけ存在し、その一つ一つがきつと誰かから大切にされている命だと思う。一人ひとりがまず基本的なルールを徹底すれば不慮の事故は減り、大切な命はこの先も大切にされるのではないか。私は大切にされているこの命も大切な命も傷つけることがないよう、精一杯ルールを守りたい。

若い命の尊さ

(茨城県)

茨城県立大洗高等学校 三年

谷脇 たにわき

恭平 きょうへい

私は学校で開催された「いのちの講演会」に参加しました。そこで、泥酔状態のドライバーが起こした事故でご子息を亡くした岩寄悦子さんの講話を聴きました。

岩寄さんは講話の中で「息子を亡くしたとき、悔しい気持ちで押しつぶされそうになった。」「事故から三年半の間、自分を責め、色も感じる事ができなかった。」など最愛の息子を失った悲しみを私たちに語ってくれました。そして「命は自分だけのものではなく、自分がどれほど大切な存在で、代わるものがないということを理解し、生活を送ってほ

しい。」と私たちに強く語ってくれました。

私はこの講話を聞いて、「いつも通りに過ごしていても、いつ、命を落としてもおかしくはない」と深く感じました。そして事故によって日常の生活を奪われた人達に思いをさせてみました。恐らく精神的苦痛に追い込まれて、現実を遠ざけるのではないかと思いました。

また、岩寄さんが大切な家族を失った気持ちを他の人に話す勇気がなぜ持てるのかと不思議に思うようになりました。この「いのちの講演会」は、命の重さ・尊さを学ぶものだと思います。そのためとはいえ、全国で講話をするという岩寄さんの強い意志は素晴らしいと思いました。自分の息子さんのように辛い体験をする人を減らしたい。自分のように家族を亡くすような辛い思いをする人を減らしたい。そのためには事故の恐怖を少しでも多くの人に知ってもらいたい。岩寄さんの言葉にはそのような気持ちが詰まっていました。

私は事故に遭った人の気持ちがいかに分かってま

す。それは、過去に事故に遭ったことがあるからです。

小学一年生のとき、学校からの帰宅のためにいつも通る道をいつものように歩いていました。そして駅前前の交差点にさしかかりました。私は歩行者の信号が青になっていたことだけを確認し、横断歩道を渡り始めました。そのとき一台の大型トレーラーが猛スピードで交差点に入ってきました。そしてトレーラーの車輪に接触し、身体を強く打ってました。いつの間にか救急車で運ばれ、病院で検査を受けていました。顔にも擦り傷がありました。幸い異常なところがありませんでしたが、意識がすっかりしてから思い出してみると「何かが少しでもずれていたら、死んでいてもおかしくなかった」と思い、トレーラーが怖くなりました。数日後、警察の方が事情を聴きに来ました。事故の状況を話そうとしましたが、恐怖心のせいかな、言葉が詰まってしまう話せませんでした。そのとき、その警察の方が「怖かったのによく頑張ったね。」と言ってくれました。その言葉のおかげで、事故の様子を何とか伝えることが

できました。しかし事故で命の危機を体験したことは今でも忘れられません。

私には目指したい職業があります。それは警察官です。私はあるときの警察官のように、市民のみなさんの安心・安全を守るような存在になりたいです。そして岩寄さんのような交通事故で大切な家族を失った被害者の方を少しでも減らしたいとも思っています。

私もし警察官になることができたなら、地域の人々が参加できる交通安全教室を企画したいと思っています。交通事故の怖さを伝え、事故の未然防止に取り組んでいきたいと思っています。もしかすると岩寄さんに講演をお願いするかもしれません。どのような形で実施できるかまだ分かりませんが、多くの人々が事故を起こさないという気持ちを常にかけてるようにしていきたいと思っています。

岩寄さんの「命は自分のものだけではない」という想いは、私たちの中だけに留めておくのではなく、たくさんの人々に伝えることで、交通事故が減るのではないかと思っています。

